

ソーシャルメディア時代における集合知とその政治的応用の研究

[2011・FW] 20821090、松田次郎

1. 研究の背景と意義

チュニジアのジャスミン革命に端を発した民主化運動「アラブの春」により、アラブ諸国を中心とした世界各国の政情は、2010年末から数ヶ月の間に、大きな転換期を迎えた。アラブの春の特徴は、その過程でソーシャルメディアが活用されたことにある。市民がソーシャルメディアを介して、政治に対する多大な影響力をもったのである。

Web2.0の潮流の中で注目を集め始めたのが、集合知の概念である。アラブの春に見られるように、ソーシャルメディアは集合知を強化すると考えられる。ソーシャルメディア時代と表現される今日において集合知を政治的に応用する方策を導くことにより、政府や自治体によるトップダウンの政治ではなく、市民との合意形成を経た、あるべき民主主義の姿を確立することができるという仮説に基づき、本研究を開始するに至った。

本研究は、集合知の定義を明確にすること、アラブの春を題材に、政治におけるソーシャルメディアの役割を探ること、そして集合知を政治的に応用する方策を提案することに新規性があり、意義がある。

2. 研究目的・方法

研究目的は、第一に、集合知の定義や概念を整理することである。混同して捉えられる傾向にある”Wisdom of Crowds” (= 群衆の知恵) と”Collective Intelligence” (= 集団的知性) の差異を明確にした。

第二に、アラブの春とソーシャルメディアの関係を整理することである。ソーシャルメディアがアラブ諸国のどのような背景において活用され、どのような役割を果たしたか明らかにし、政治におけるソーシャルメディアの新たな役割を追究した。

第三に、集合知を政治的に応用する方策を提案することである。集合知を応用することによって、集団(主権者たる国民)の意見の最大化を図った。また、この提案により、本来あるべき民主主義の姿を示した。

研究方法は、集合知・政治・ソーシャルメディアという3つの主題についての文献サーベイによる理論整理、現状分析であり、それを基に結論を導いた。

3. 研究結果・考察

集合知の定義・概念や民主主義の理論体系を整理した上

で、集合知の概念とコンセンサス型民主主義の概念が近似していることが明らかになった。その根拠は以下の2点である。一つは、あることに対する複数の意見を集約し、最適化(最大化)するという点で同じゴールをもっていることである。もう一つは、多様性(集合知が機能するための条件の一つ)がポジティブに作用するために必要な「親身な傾聴とオープンなコミュニケーション文化」などの条件がコンセンサス型民主主義の理念と一致したことである。

ソーシャルメディアの存在は、アラブの春を進展させる大きな要因になったが、チュニジアやエジプトに代表されるように、政権転覆後も、政情に対する市民の不満は解消されなかった。その要因は、市民と政府が「国」という一つの集団としてまとまらずに分離していたために、両者間に不調和が生まれたことである。

本研究の結論として、集合知を政治的に応用する方策である、群衆の知恵と集団的知性の統合モデルを提案した。

4. 結論

下の図は、結論として提案した集合知の政治的応用モデルである。集団の分離を改善できる、この新しい集合知モデルを基に政治を推進していくことで、コンセンサス型の要素が強化された理想の民主主義形態が確立される。また、ソーシャルメディアがもつ高い集約性は、このモデルが円滑に循環するために不可欠であり、政治にそれが活用されるような構造・環境の整備が必要であると結論づけた。

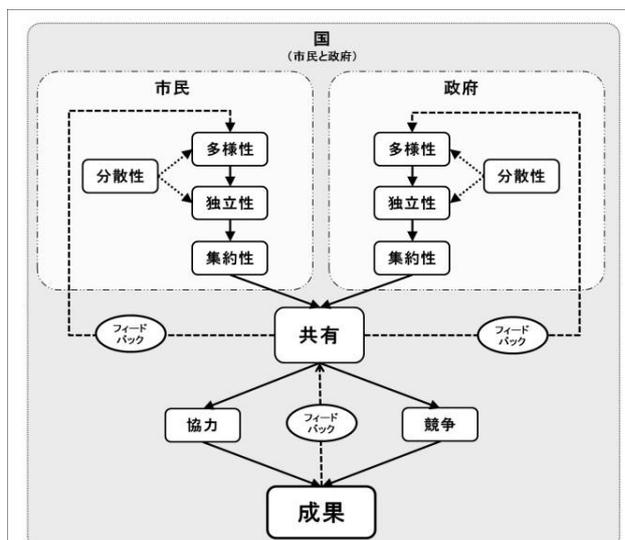


図 集合知の政治的応用モデル